

特 71

921

神の摂理を論ず

露國神學博士ウ、デ、クドリャフツェフ 述
日本 松本高太郎 譯

正教會發行

~~252~~
~~260~~

301464-001-9

特71-921

神の摂理を論ず

ウ、デ、クドリャフツェフ / 述

M39.4

ABI-0001



特ク/ 92/

特ク/ 92/

神の攝理を論ず

神の至上の實在の認識と相待ちて吾人の徳義的生活を支配するものは神の攝理の
 信仰なりとす。神の存在の眞理が假令如何に深く吾人の意識に徹底するも、如何に
 明晰に吾人の智能を理解せらるゝも、若し神が世界の創造者たるに止まり世界の攝
 理者として推理せらるゝに非ざれば、此眞理は唯だ知識上に勢力を有する普通一般
 の抽象的理論の眞理たるに止まりて吾人の徳義的生活を支配する大なる勢力を有す
 ることなきなり。故に神に關する思想は此神が世界の創造者たるに止まらず全世界
 及び個々の存在物を保護し攝理すとの信仰に伴はれて始めて吾人の生活に活ける實
 際の關係を有するものと爲るなり。去れば神に於ける吾人の凡ての宗教的關係は神
 を以て攝理者と爲す思想に基くものにして、若し此思想なからんには神に關する理
 論は存すべきも一の宗教だも存することなかるべし。

然れども吾人の宗教的徳義生活を支配する神の存在の眞理の信念と神の攝理者たる

39 4 9
 内交

二
との識認の實質的關係は必ずしも哲學の思想界に認容せらるゝに非ず。吾人は此事に關して凡神教の例を引かざるべし。何となれば凡神教に於ては萬有及び神靈は神に造られたるに非ず、神以外に存在を有するに非ず、其生命は神自身の發展に過ぎずして、萬有を主宰するは至上の實在の自由に非ず、無差別なる實體の無意識の必然法なればなり。而して神と世界との區別を認むる其哲學系統に於ては攝理の觀念は神と世界との關係に對する二派の反對なる見解の影響を受けた。即ち一は極端に神と世界とを離隔し他は之に反して極端に神と世界とを接近し、一は神と世界との關係を超絶的と爲し他は含有的と爲す其見解の相違より攝理の觀念にも相違を來せり。換言せば二派の反對なる見解は各々其極端に走れる結果、攝理の觀念の意義を失はしめ單に名目のものたらしめたり。神と世界とを全く離隔し兩者の關係を超絶的と爲す極端説は曾て佛蘭西及び英吉利の自然神教徒に唱道せられたり。彼等は世界の獨立及び自然界の理法と世界の創造者の概念とを調和せしめんとせしが、其方法を發見するを得ずして遂に神と世界とを全く離隔するに至れり。而して彼等の見解の缺點殊に近世の哲學者フイヒテシエルリングヘーゲルの理想論の直接間接の

影響は獨逸の唯理論者をして攝理問題に關し反對の極端説を唱ふるに至らしめたり。神と世界との關係を含有的と爲す獨逸の唯理論者の見解は凡神教の見解に轉ずるに數歩を餘すのみ。故に攝理の觀念は神と世界とを極端に接近せしめし彼等の見解に於て萬有及び神靈の自然的必然の理法に變ぜられたり。

今攝理に關して自然神教及び凡神教の見解の如く極端に走らざる眞正の見解を立てんには左の根本的眞理即ち「一」神は個位の最完全の實在なること「二」世界は神より出でたるものなるも有限なる及び不完全なる存在物の集合體なること「三」眞理を講究せざるべからず。此二眞理は神と世界との差別を確定し而も兩者を分立せしめず却つて兩者の關係即ち攝理を存立せしむるものなり。

一 神は個位の絶對的完全の實在なり。神は個位の實在なりとの概念は神の活動を想はしめ又神は最完全の實在なりとの概念は此神の活動の不斷不易なるを想はしむ。何となれば個位の實在は活動せざるを得ずして又最完全の實在は其活動を停止するを得ざればなり。蓋し完全は際限を有せず盡滅するを得ざるなり。故に神を絶對的完全の實在と認むる以上は神の完全即ち全能、睿智、至善其他が唯だ一の時例へば

世界創造の時にのみ發動して後ち全く其發動を停止せしものと認むるを得ず。吾人は神が世界の創造に於て其完全を全然費消し盡せしと假定し得るの時に於てのみ神が世界を創造せし後世界と關係を絶ちしを思想するを得べし。然れども此事は世界が自己の創造者と匹儔し神の無限の完全を具備せる時に於てのみ假定し得べくして、世界が不完全有限なる場合に此事を假定するを得ず。且つ一方より論ずるも絶對的完全の實在が僅かに一の活動に於て既に其完全を消費し盡したりと思惟するを得べきか。故に吾人は神が世界創造の時に於てのみ活動せしに非ずして世界に對して不斷に活動を繼續し、彼が全能、睿智、至善は其凡ての受造物を包括し之を保護し受造物をして其目的を達せしむるを認めざるを得ず。

然れども論者或は辯ぜん、神が世界に對して其攝理的行爲を絶つも之に依りて神は其完全を増減せしに非ずして依然として絶對的活動者たるの資格を存すと爲すに何の不可がある、神は世界を獨立の物として造り世界をして自治せしむるを得べし、而して世界の此自治は神の活動を増減し若くは消長せしむるものに非ず、何となれば神の活動は此場合に唯だ外部に於て世界に對せざるに過ぎずして其活動は世界創

造以前に於けるが如き伏在的性質を受くべければなりと。

此辯駁に答へんに假令神の活動が世界の創造若くは受造物の保護に於て減退せざるも、一たび伏在的に發動せしのみならず有限物の創造に於て外部に發動せし以上は、自己の創造せし有限物の存在する限り此有限物と關係を絶つ能はざるなり。若し之を然らずとせば是れ神の絶對的性質と神の完全を否定するものにして、神が其受造物に對して自ら其活動を制限せりと爲すものなり。神は絶對的實在として凡ての存在物を包括し凡ての存在物の上に活動し他物に制限せられざる者ならざるべからず。故に絶對的實在以外に神に離れ神に支持せられずして存在する物の存するを得ず。世界が未だ存在せざりし時に於ては神の活動は伏在的なりしなり。然れども一たび神が其性質を外部に發現し有限物を創造せし以上は此性質の發現に制限を加へ此發現を以て一時的の作用と爲すを得ず。神は無限者として又絶對の完全者として其活動を凡ての物の上に及ぼし不斷に其活動を繼續すべき者なるが故に常に世界の起源に於てのみならず世界の存在する限りは之を保護すべき者なり。然るに神が自己の活動を自ら制限し世界に對して自己の完全の發動を停止すと爲すは、是れ神の保護

を待たざる自治の世界が其運命に於て最完全なる實在の保護に依頼するに比して一層完全なる状態に在ると爲すものにして、此の如き見解の不眞理なるは固より論を俟たざるなり。

六
二 今若し吾人は更に轉じて世界の概念を講究せば世界が其性質の上よりして絶對的獨立のものたること能はずして神の保護宰治を要するを見るなり。世界は有限なる及び不完全なる存在物の集合體なり。而して世界の有限なる點は左の性質に存す。世界は自ら其存在を創始するを得ずして存在の原因を有し此原因の作用の結果なり。然れども作用は之を出だす原因を離れて存するを得ずして原因と其存在を共にするなり。夫れ火は燃料を離れて存在するを得ず又植物は土地空氣光線を待たずして存在するを得ず。此の如く凡そ個々の物及び地上の各現象は之を出だす物質の勢力と其存在を共にするなり。然らば個々の物に適用せらるゝ此定則は世界全體に對しても適用せられざるべからずして世界も亦一個の物として自己の至上の原因を離れて存在するを得ざるなり。世界の起源は至上の原因を認めずして思想すること能はざるが如く其存在の繼續も亦此原因との關係を認めずして思想するを得ず。

尙世界の有限なる點は左の性質に存す。世界の個々の物及び各現象は存在することを得又存在せざることも得る假存的のものなり。凡そ世界の個々の物は一として必然に存在すべき性質を有せず。然らば世界の個々の物及び各現象の屬性を成す此點は是等の物の集合體なる世界にも應用し得べくして、世界も亦存在することも得又存在せざることも得る性質のものたるなり。斯く世界は其性質に於て必然に存在すべきものに非ずして存することも存せざることも得るものならんには其存在の持續に於ても其起源に於ても神の意志の活動を要すること明かなり。而して若し神の意志の活動息まんに世界は之と同時に無に歸せんのみ。故に若し世界が其存在を持續すとせば是れ世界自身が之を持續するに非ずして世界を保護し支持する造主の意志が之を持續するなり。

次に世界の有限は必然に世界の不完全を想はしむ。而して世界の不完全なる特徴は先づ世界が時間と空間に制限せられ變化すべき性質を有するの點に存す。世界は其受造の時に於て既に完備せられ以來不變不易のものとして存するに非ず。世界は幾多の星霜を経て現時の状態を受けしものにて世界の歴史は今日を以て終結せしに非

ず。之に依りて世界は過去に於て然りしが如く現時に於ても完備せる完全なる及び不變なる存在物に非ず。又吾人は公平に世界を観察せば有限より來る所謂自然の不完全の外に世界の中には自然界に於ても將た靈界に於ても多くの缺點不完全の存するを發見するなり。即ち徳義上の罪惡及び此罪惡より來る有形世界の不規律是れなり。斯く世界は不完全にして世界の原因者は絶對的善なる及び完全なる實在なりとせば此兩者の關係は如何に思想せらるゝを要するか。吾人は茲に至りて最完全の實在者が不完全の世界をして完全の域に達せしめんと力め世界の秩序を恢復し有限なる不完全なる世界を益々完全に導くを思想せざるを得べきか、世界に對する神の意志の作用即ち所謂攝理を認めざるを得べきか。此事を認めざるは是れ神の概念を破壊するものにして神が世界を完全に導くを得ず或は能くせず或は欲せずと爲すものなり。

今假りに極端に世界を樂觀し世界を不完全視せず世界の中に於て一の缺點をも發見せずとするも此場合に吾人は世界が其以上の完全を求むるの餘地なきまでに絶對的完全の者に非ざるを認めざるを得ざるべし。何となれば世界を絶對的完全の者と認

むるは世界を神と同等に歸せしむるものなればなり。且つ吾人は神が至善なるものとして世界に一層の完全を與ふるを思想せざるを得べきか。而して此の如き一層の完全に進むの必要は少くとも靈界に於て有り得べきを勿論何人も排斥せざるべし。然れども論者或は論ぜん、世界は不完全にして漸々一層の完全に達するを要すとするも世界が自己の目的即ち完全に達せんとする此動作は必ずしも造主の直接の指導及び統御に依りて行はるゝと思想するの必要あるか、造主は世界を創造するに方りて世界に漸次の發達を以て自動的に其目的を達する傾向と勢力とを賦與するを得ざるか、彼の種子が自ら發芽し發育し人が進歩發達を以て自ら完全に進みつゝあるが如く世界も亦自己の理法に従ひ自己の原因者の關涉を待たず獨立して發達し完全に進むを得べしと。

然れども論者に問はん世界の個々の存在物は果して神の攝理を待たず獨立して發達し其目的を達しつゝあるか。今一步を譲りて此事が有り得べしとするも個々の存在物が獨立して其個々の目的を達するが故に世界全體も亦獨立して其目的を達すと斷定するを得べきか。否決して然らず。個々の存在物の區々の發達は個々の存在物の

一〇
集合體其者の調和的發達を保證するものに非ず。例へば個々の樹は如何に秀絶なるも園丁が之を配置するに非ざれば庭園を成さず、個々の顔料は自身に繪畫を出たすを得ず、個々の音樂者は豫め作曲者より樂譜を示さるゝに非ざれば個々に奏樂して調和せる合奏を爲すを得ず。世界に於ても亦然り。世界の一般の秩序及び部分に於ける全體に於ける世界の發達は個々の存在物が個々に其目的を達するを想はしめ此目的が世界全體の進行運動と符合するを想はしむ。故に個々の存在物は其個々の存在の範圍内に於て獨立して發達するに止まらず世界の一般の目的を助成するものならざるべからず。去れど此事は左の二途に於てのみ有り得べきなり。即ち其一は個々の存在物が自己の目的を知るのみならず世界全體の目的を知りて其目的を達せんとする場合、其二は各々自己の範圍内に於て自己の目的に向つて發達する個々の存在物の上に廣大なる智慧、至上なる思想の君臨するありて之を統御指導する場合なり。然らば吾人は斯る廣大なる智慧、至上なる思想を何處に求むべきか。吾人は古代の一部の哲學者が認めし如く世界を有意識の存在物と爲し世界の外装の蔭に世界の靈の存在するを認むべきか。若し吾人にして此幼稚なる哲學思想を取らざる限りは

世界の個々の現象を一の目的に指導する此廣大なる智慧、至上なる思想を以て神の思想及び智慧即ち攝理なりと解釋するの外他に途なかるべし。去れば世界の概念は神の概念と同じく吾人をして神の攝理を認むるに至らしむ。而して前段論じ來りし世界の性質即ち其有限(不獨立)及び不完全は此攝理の性質を吾人に知らしむ。即ち世界の有限なるは神が世界を保護するを想はしめ、世界の不完全なるは神が世界を完全に導き世界を宰治するを想はしむ。故に攝理は世界を保護し世界を宰治する者の動作なり。斯く攝理の眞理は神及び世界の正しき概念より必然に推理せらるべきものなり。然れども單に理論の上より推理せられたる此眞理が根本的に説明せられんが爲めには有形世界に於ける神の保護宰治の事實に證明せられざるべからず。事實の證明は理論の眞理を明瞭ならしむるのみならず此眞理の確實を保證するものなり。故に此證明ならんには神及び世界の概念よりせらるゝ攝理の推理は果して正しき論理上の推理なるか否かを疑はるゝを免れず。何となれば論理の上に於て如何に正しきも世界の實狀と矛盾するものは之を眞理と爲すに足らざればなり。

今神の攝理の保護が此要求に背かざるを證するは難きに非ず。世界が存在するの事實、世界の理法、及び個々の物が存在するの事實は既に世界が神に保護せらるゝを證するものなり。而して植物動物の種類が滅絶するの例及び天體が壞損する例の如きは固より世界に對する神の保護を駁するの反證と爲すに足らず。此現象の例は有機體の個々の物が常に死歿するの例と均しく神の保護の眞理を駁するに力あるものに非ず。夫れ個々の物の存在が暫時的なりてふ原則は之を個々の物の集合體に及ぼすを得べし。而して個々の物と其集合體との差異の點は唯だ其存在の繼續の時間の長短にあるのみ。故に神の保護を解するに神が其創造せし凡ての物を永遠不易に存在せしむとの意義に於てすべきに非ずして、神が凡ての存在物を世界の秩序目的の爲に必要なる時期まで存在せしむとの意義に於てすべきなり。

次に神の攝理の宰治に關しては之を事實に徴して證明するは頗る困難なり。神の宰治の實跡は自然界及び靈界の諸現象に於て吾人の理性を満足せしめ得るの明瞭を以て示されず。去れど之が原因は世界の現象の運行と攝理の思想との矛盾に存せずして此問題の本質と人の理性の性質に存するなり。神の宰治は世界の各存在物各現象

が智なる目的を有し相補益して世界の一般の目的を達するを想はしむ。然れども此假定の眞理を世界の各存在物及び各現象に徴して證明し、各存在物が世界に對して有する關係を明示し、各存在物が世界の一般の目的を如何に達するかを説明するは人智の企て及ぶ所に非ず。何となれば此事を行はんと欲せば全體と部分とに涉り過去と現在とに涉りて全世界を識り、世界の各存在物及び各現象の相互の關係を識ると共に、吾人の智力の及ばざる遠き未來に於ける世界の目的を識らざるべからずして吾人の知識の現狀は到底此要求に應ずるを得ざればなり。去れど世界の目的に關して此目的が智なる善なる者ならざる可らざることの一事は之を現時に於て斷言するを得べし。何となれば世界の創造者は最完全の實在なればなり。然れども目的の性質を識りたるは未だ目的の實質を識りたるに非ず。

以上の理由に依りて吾人の理性が神の宰治の全體を知悉了解せんとするは到底企て及ばざるを知るべし。故に吾人の理性は世界の諸現象の上に現はれたる神の攝理の實跡の一部を發見するを以て満足せざるべからず。而も此實跡は吾人の理性に神の攝理の眞理の信念を喚起せしむるに足るものなり。何となれば此實跡は吾人に世界

を宰治する者は偶然若くは必然の理法に非ずして睿智なる思想及び意志なるを證明すればなり。例へば傑作の詩歌の全篇を通讀せざるも其斷篇に徴して作者の非凡の詩才を下するを得、大厦の善美なる一室に徴して此建築物を設計せし者の技倆と才力を推測するを得るが如し。

誰か公平に自然界を觀察せば自然界の諸現象の有意的なるを認めざるを得ざるべし。今一步を譲りて此有意的なることが部分に於て立證せられず之が爲に近世の學者の異説を迎へたりとするも、而も其有意的なることの夥多の事實例へば有機體の組織に現はれたる事實及び萬有の開發の歴史に現はれたる事實を認めざるを得ず。故に此有意的なることが或る場合に於て立證せられずとせば是れ唯だ之に對する具體的説明の不充分なるを證するに過ぎずして萬有の組織の有意的なる事實を否定するものに非ず。例へば吾人は吾人の知識の現狀に於て植物動物の各種類が何故に必要なるかを説明するを得ざるも而も有機體が完全に進むの事實及び有機體が人の生存を幫助するの事實を認めざるを得ず。又吾人は地球の現在の組織が有機體の生存に適するの事實を認めざるを得ず。然らば萬有の組織開發に現はれたる此有意的實跡は何

者の作用なるか。此有意的實跡が無意識なる萬有自身の作用に非ざるは固より明かなり。何となれば無意識なる物は智なる計畫を爲すを得ず將來を計るを得ず又萬有の存在を幫助するを得ざればなり。故に無數の無意識なる物體及び現象が一の智なる目的を有し互に相調和すとせば是れ明かに一の睿智なる實在の思想及び意志が此諸物體及び諸現象を統一し神の攝理の手が萬有を宰治するを示すものなり。

次に靈性の存在物なる人類に關しても亦其歴史の發展の有意的なるを認むるを得べし。人類の歴史の發展は偶然に行はれ或は自然界の影響より來り或は人類自身の任意の行動より來るが如しと雖も、而も公平に之を觀察せば人類が完全に進むの事實即ち換言せば人類の歴史の發展の有意的なるを認めざるを得ず。勿論人は無意識なる自然界の物體と異なりて理性及び意志を具へ自ら目的を立て、之を實行するを得る者なり。然れども人の意志の行動は概して自身一己の目的の範圍を脱するもの非ず。人は多く自身一己の利益及び目的に従ひて行動するを常とし如何なる偉人と雖も全人類の目的に着目し之を實行せんとするが如きことなきなり。今假りに全人類の目的に着目し之を實行せんとする者ありとするも人類各自の目的を統一し之を

自己の目的と合せしむるの方法を發見するを得ざるべし。故に若し人類の歴史が人類自身の任意の行動より來るとせば其利害を異にする人類各自の目的は互に衝突して智なる調和の現象を出だすことなかるべし。然るに人類各自の目的が斯く區々なるに拘はらず人類の歴史の發展には有意的實跡が認められ規律秩序が認めらるゝなり。即ち換言せば人類が益々完全に進むを認めらるゝなり。人間間に於ける或る事件の結果は豫め吾人の期せざる所のものにして初め災殃と爲せしものが福祉と變じ有害と爲せしものが有益と化するなり。斯く人類の歴史の發展が人類各自の豫期する所に反すとせば此歴史の發展が人類自身の任意の行動より來るに非ずして見えざる至上の能力に指導せらるゝや明かなり。去れば人類各自の行動が區々なるに拘はらず其歴史の發展の有意的なるは自然界の物體が無意識なるに拘はらず其組織開發の有意的なると均しく神が世界を攝理するを證するものなり。

然れども神の攝理の實跡は人類の一般の歴史に於て證明せらるゝも個々の人の生活に於て證明せられざるか。此點に關しては吾人は神の攝理の實跡が明瞭を缺くを認めざるを得ず。去れど神の攝理の實跡が明瞭を缺くの故を以て又吾人の外部の事情

が偶然なるが如きの觀あるの故を以て神の攝理に限界を立て或る論者の如く全人類及び世界の事件に關して神の攝理を認め個々の物及び人に關して神の攝理を斥くるは其當を得たるものに非ず。神の無限なる善は一切の存在物を包括し凡ての物を平等に眷顧すべく又神の睿智は個人の幸福を全世界及び全人類の幸福と調和せしむるを得べし。世界の各存在物を調和せしめ全人類を遠大なる目的に導く最完全の實在一は一錢にて償はるゝ至微なる小鳥を眷顧するに取て困難を感ずべき者に非ず。斯く神は至微なる小鳥をも眷顧する者なりとせば況んや靈性の存在物なる個人を眷顧せざるの理あらんや。人の個位は人類に併吞せらるゝ者に非ず個人は全人類の目的を達する爲めの方法若くは材料に非ず。個人は自己の生活と行爲とを以て人類全體の幸福を助くると共に自身一己の完全及び幸福を達するの權利を有し神に眷顧せらるゝの權利を有す。然るに個人の此地位を排斥し神を以て世界及び歴史の全局のみを配慮すと爲すは是れ全く攝理の意義を失はしむるものなり。人の徳義的行爲は必ずしも物質的利益の目的に伴はるゝに非ず。吾人は徳義を神より命ぜられたる義務として行ひ此義務を遂行せば至上なる立法者の同情と愛とを迎へ得べしと信するなり。

然るに神が吾人を自然の運命に任せて顧みず唯だ世界及び歴史の全局のみを配慮するに止まらば吾人の此信念は何處より來るか。若し吾人の徳義的行爲が常に神より獎勵せられざるのみならず全く神に注目せられざるものならんには吾人が徳行を勤め罪惡と戦ふは其何の爲めなるを解する能はざるなり。

斯く神が個人を攝理すとの信念は其攝理の途の不明なるに拘はらず人の徳義心宗教心の基礎を成すなり。此信念は凡ての宗教の根據にして各宗教の歴史に神が人々に顯現せし傳説、神が善人を保護せし傳説、惡人を懲罰せし傳説の存するは皆此信念を證明するものなり。此信念ありて祈禱、獻祭、宗教上の儀式存し、神と吾人との宗教的關係の存するを得るなり。故に若し此關係が人の妄想の虚構に非ざる限りは吾人は此關係の眞理を認めざるを得ず。凡そ人類社會及び個人の上に起る事件は此事件が偶然に非ずして人を賞し罰し或は人を教訓し指導する神の攝理なるを吾人に示す。而して實に具眼の觀察者は自己の生活に於て又自己の周圍の人々の生活に於て神の攝理の實跡を發見する場合少からず。

去れば吾人の理性は神の存在の眞理を認むると同時に必然に神の攝理の眞理を認む

るなり。吾人は自然界及び靈界の出來事の進行を觀察して至上の睿智、至上の意志の發現を認めざるを得ず。然りと雖も吾人の理性の此の如き觀察は到底有限なるを免れず。吾人は神の攝理が顯著に認めらるゝ現象以外に神の攝理の實跡が明晰を缺き萬有の自然法に依りて行はるゝが如き觀ある多くの諸現象に接するなり。故に此諸現象は世の論者に神の攝理の事實を論難するの材料を與へ彼等をして神の攝理を排斥せしめたり。

神の存在を認めて神が世界を宰治するを認めざる教旨は自然神教なり。自然神教は第十八世紀に於て英吉利、佛蘭西の哲學者等に唱道せられたり。去れど近時に於て神の攝理の眞理の排斥は多く神の個位の存在の排斥と合せらるゝに至れり。斯く此排斥に於て極端なる理想論(凡神教の根據)と唯物論は一途に出で、其論據を異にするに拘はらず兩論難の内容は略ぼ同一なり。唯だ兩者の異なる點は自然神教徒は世界の性質世界の缺點を擧げて神の攝理の矛盾を證し、近世の論者は萬有の性質を不問に置き其運行の規則的なるを證するに在るのみ。今吾人は是等の論難の主要の論據を擧げて之が批評を試みん。

吾人は前段に於て神の攝理の眞理は神及び世界の概念より推理せらるゝ必然の結果なるを論ぜしが、或る論者は却て神の概念に於て神の攝理を排斥する論據を發見せり。古代の希臘哲學に於てエピクロス學派は神の攝理を排斥し論難して曰く、神が世界を配慮し世界を宰治するは神の無限の幸福と矛盾す、何となれば神が世界を配慮するは神をして煩勞せしむるものなればなりと。然れども斯る立論は無爲無行を以て幸福の理想と爲すエピクロス學派に於てのみ歡迎せらるべきものにして毫も取るに足らざれば今茲に之を論評するの贅を爲さざるべし。エピクロス學派の立論に比すれば近世の自然神教徒の立論は較く取るに足るなり。彼等の立論に曰く、神の絶對の完全は其受造物の完全を要求す、而して受造物の完全は世界が全く獨立にして不羈なるを意味す、最完全の實在は出來得る限り世界を完全に造るべき者なり、而して完全の世界は其存在の爲に神の保護を要せざる者ならざるべからず、是れ猶人の製作なる完全なる機械が自ら運轉して技師の關涉を要せざるが如しと。去れど此立論の弱點は容易に發見せらるゝなり。神の絶對の完全は勿論神に造られたる世界の完全なるを想はしむ。然れども受造物が造主と同等ならざるは既に世界

が最完全ならざるを證するものなり。故に世界は唯だ比較的完全の物として又比較的獨立の物として其造主に保護せられ宰治せらるゝの必要を有す。又一方より論ずるも完全なる世界の概念は世界の絶對的獨立を要求すとの論者の推理は全然正しからず。機械若くは自動機は最完全なる造物の理想に非ず。最完全の造物とは其部分の自由獨立なると共に全體に調和規律の存する物を指すなり。調和せる音樂の合奏は完全なる一の樂器の奏樂に優る。各自の傾向と目的が有意的に調和せる自由なる有意識の人の社會は自由意志を有せず盲目に運動する機械に優ること數等の上在り。故に完全なる造物とは部分の獨立なると共に全體に調和一致の存する世界の如きを指すべきにして自動機の如きは之が適例に非ず。

又論者が神と世界との關係を技師と機械との關係に對比するは其當を得たるもの非ず。此對比に於て神と世界との關係の概念は時間と空間の概念に牴觸す。即ち此對比に於て世界は空間的獨立の物として神より離るゝなり。尙此對比に於て神の行爲は二若くは三の時期に別たる。即ち第一は世界創造までの時期第二は世界創造の時期第三は世界との關係の斷絶の時期是れなり。然れども實際に於ては世界は神よ

り離るゝを得ず神も亦世界と關係を絶つを得ざるなり。

近世の自然神教徒の先導者なる第十八世紀の自然神教徒の陥りたる矛盾の立論に對しても亦論評を加ふるの必要あるを見る。彼等は世界が最完全の原因の完全なる造物として神の攝理を要せずと立論し之と同時に世界は不完全なりライブニツの樂天觀は事實に矛盾すと立論し之を論據として同じく攝理を否定せんとす。斯く彼等は同一の斷案を其論證の目的に従ひて或は眞理と認め或は不眞理と認め、世界を或は完全と認めて攝理を否定し或は不完全と認めて同じく攝理を否定するなり。然れども是れ矛盾の甚だしきものにて若し世界が完全ならんには樂天觀を論難するの理由なく、若し不完全ならんには世界が神の攝理を要するを認めざるべからず。何となれば世界が完全なる場合には攝理の要なしとするも不完全なる場合には攝理を要するは彼等の認容する所なればなり。

既に論ぜし如く世界の有限及び不完全は吾人の理性をして神の攝理を認むるに至らしむ。然るに神の攝理を排斥する者は却て世界の此性質に於て自己の論難の論據を發見す。古來神の攝理を排斥する者は世界が神に攝理せらるゝに非ざる反證即ち世

界に不規律災害の存する事實を蒐集するに全力を傾注す。實にライブニツの評する如く前世紀の論者は其智を聰敏にし世界の凡ての缺點を指摘せんと力めたり。而して此事は彼等を驅りて現世界の凡ての現象が偶然にして世界は何の睿智なる能力にも攝理せられずと結論せしめたり。

神の攝理を排斥する論者は世界に災害疾病及び不規律の存する事實を枚擧し其枚擧の數と量に自己の論據を求め淺薄なる觀察者の同情を迎へんとす。去れど是等の事實が論理上に於て有する價值は唯だ世界には多くの不完全及び缺點存すとの斷案を得せしむるに過ぎず。然れども世界には果して此の如き不完全即ち吾人が一般に惡と名づくるもの存するか。

神の攝理を辯護する或者は反對論者の示す事實即ち世界に不規律の存する事實を否認するは彼等の論難に答ふる途なりと思惟せり。故に彼等は吾人の眼に映ずる世界の不規律は唯だ皮相の觀察より來ると爲し世界の組織の實に善美且つ規律的なるを證せんと力めたり。斯く彼等は世界に於ける惡の存在を神の睿智及び善と調和せしむるは此惡の存在を塗抹するに於て始めて期すべしと爲せり。而して此事を最も顯

著に試みしはライブニツなりき。然れどもライブニツの立論は一方にのみ偏せしかば、當に惡の存在の問題に解決を與へざりしのみならず却つて反對論者に其攻撃の新材料を供したり。

神の攝理を辯護する者が世界の現象の有意的なると規律的なるを立證して世界に不完全の存する事實を塗抹せんと企つるも、此事は反對論者を説服するに力あるもの非ず。今假りに反對論者の示す事實が過大にして世界に存する災害の如きが却つて人の爲に有益なるの事實が発見せられたりとするも、吾人の智力が有限にして世界の凡ての組織及び神の攝理の凡ての途を知悉するを得ざる限りは其意義の不明なる現象は尙多く世界に存すべくして、強ひて其有意的にして且つ規律的なるを立證せんとせば到底牽強附會に陥るを免れず。去れば此現象と此失敗は反對論者に其攻撃の資料を與ふべし。

斯く反對論者の示す事實即ち世界に不規律の存する事實を塗抹せんとするは彼等を満足せしむる途に非ずとせば、吾人は反對論者と同一の立脚地に立ち世界に不規律不完全の存する事實を認め、之と同時に彼等の推理の正しからざるを證せざるべか

らず。實際に於て若し一方よりは最完全の神存在し他方よりは多くの不完全を有する世界存立すとせば此兩者の關係は當に如何なるべきか。彼の自然神教徒の論ずるが如く神は世界と何の關係をも有せざるべきか。若し然らんに此事は神の概念に矛盾する也。最完全なる善なる及び之と共に全能なる神は世界を不規律及び惡の儘に抛擲するを得ず。若し之を然らずとせば是れ神が故意に世界を放任し其運命に任すと爲すものなり。故に若し最完全の實在の存在が確認せらるゝ限り世界に不完全の存するは必然に神の攝理の存するを想はしむ。而して此の如き實在は不完全を矯正し凡ての物を幸福に向はしむるの目的を以て其攝理を世界に加ふる者ならざるべからず。神の世界創造の目的は絶対に善なる及び睿智なるべきものにして此目的は勿論達せられざるべからず。何となれば神が若し其豫定の目的を達するを得ざる物を造りしとせば神は無限の完全に非ざればなり。故に若し此目的が達せられざるべからずして、且つ自然界は其無意識なるに因り靈界は其個々の活動者の目的の區々なるに因り自ら豫定の目的を達するを得ずとせば、世界の不完全は既に神の攝理の存するを想はしむ。

次に反對論者の示す徳義界及び自然界の不規律の現象に至りては若し此現象が世界の全秩序を破毀するに足らば其場合に於てのみ論者の期するが如き價值を有するを得べし。然るに實際に徴するに此事なき也。世界に存する不規律の現象は世界の全秩序を破毀するを得るまでに普遍ならず。反對論者は世界の不規律の現象を過大にし強ひて世界を悲觀するも此悲觀は公平なる觀察に受けらるゝ者に非ず。公平なる觀察は明かに世界の現象が規律的にして人類が或る崇高なる目的に向つて進むを認む。勿論世界には不規律の現象の存せざるに非ざるも此不規律の現象は恰も河中の石が河流を堰止むるを得ざるが如く世界の一般の秩序を破毀するを得ず。例へば世界には地震、暴風雨、氾濫、疫癘、戦争の如き不規律の現象存するも之に拘はらず吾人は世界の現象が大體に於て秩序を具へ世界が其豫定の目的に背馳せざるを見る。又人類各自は私利私慾を事とし公益を顧ざるに拘はらず人類は管に泯滅せざるのみならず漸々完全に進み其存在の目的を達するを見る。故に此事實は神の睿智が世界を統御し世界を其豫定の目的に導くを證するものなり。加之神の睿智は世界の不規律及び惡を利用して(例へば災害疾病の如き)却つて人類の徳義を進め其崇高なる目的に向はしむ。

然るに佛蘭西の百科學者の末派なる近世の唯物論者は世界の現象の性質如何を不問に置き専ら實驗の見地より神の攝理を排斥す。彼等論じて曰く、世界の現象に秩序の存する存せざる吾人の問ふ所に非ず、吾人は實驗に徴して世界の凡ての現象が必然の理法に依りて行はるゝを知る、凡そ有機體無機體の萬有は物理化學生理の理法に支配せらるゝものにて現在に於ても過去に於ても世界の現象が此理法以外に行はるゝを見ず、精神界に於ても亦然り、個人の心理上の諸現象及び人類の歴史上の諸事件は原因結果の必然の理法より來る、而して吾人は自然界の現象に於て然るが如く精神界の現象に於て超自然の勢力が此現象に關涉せし形跡を發見せず、若し超自然の勢力が實に自然界及び精神界の現象に關涉するものならんには物理心理の理法は變調を呈し世界に新事物及び新現象を來さざるべからず、然るに事實に徴するに此事なきなり、去れば若し吾人が世界の起原を説明するに超自然の原因を認めざるべからずとせば、唯だ此一事に於てのみ超自然の原因の作用を認むべくして、此以上に涉り世界の進行に超自然の原因の關涉即ち攝理を認むるは萬有の理法の獨立なる

事實に矛盾するものなりと。

吾人は此唯物論者の論難と前の自然神教徒の論難を對照して神の攝理を排斥する者の論法の便利なるに驚かざるを得ず。世界の現象が規律を具へず萬有の運行が亂雜ならんか、彼等は曰ふ此不規律は攝理の存せざるを證するものなりと。世界の現象が一定の法則に依りて行はれ萬有に調和存せんか、彼等は再び曰ふ此規則的なるは攝理の存せず萬有が自ら運行するを證するものなりと。然れども退いて考ふれば此矛盾論法の起るは却つて現實の世界の事物が絶対に不規律に非ず又絶対に規律を具ふるにも非ざるを想はしむるものにて敢て異ひに足らず。現實の世界は自然界が規則的に運行し精神界が自由に行動するを示す。故に此自由行動と規則的運行との配合は萬有の理法を害せず又人の自由をも傷けずして世界を其遠大の目的に導く至上の能力の存すべきを想はしむ。

若し夫れ萬有の運行の規則的なることに至りては管に神の攝理を否定せざるのみならず却つて神の攝理の存するを證するもの也。無意識なる萬有は必然なる不變の理法に支配せらるゝに非ざれば運行し得べきに非ずして、此理法が衝突することなく

平衡を失ふことなく秩然として亂れざるは世界の組織及び秩序が至上の思想及び至上の睿智に監督せらるゝを示すなり。何となれば自然力の盲目なる無意識の動作は固より自身に秩序的調和的現象を出だすを得ざればなり。故に吾人が萬有の理法と名づくるものは其實は造物主の睿智なる意志の表現若くは神の攝理の方法を指すに過ぎず。吾人が萬有の理法を認むる時は之と共に物質及び自然力の上に或る者の立つを認め物質及び自然力の動作の正しかるべきを認むるなり。吾人は理法を分子より成立つ物質として解さず。又吾人は理法を萬有の勢力として解さず。何となれば勢力は未だ理法に非ずして一定の法則に従ひて動作するものなればなり。故に理法とは物質及び勢力の上に立ちて之を支配する或る者を指すにて此或る者とは萬有を統御する神の意志の表現として解せられざるべからず。

然るに論者は神の攝理を奇蹟と同一視し攝理の事實を萬有の運行の規則的なるに求めずして却て萬有の運行の變調に求めんとす。彼等論じて曰く、若し神が世界を攝理するものならんには萬有の運行は變調を呈せざるべからず、然るに實際に於て此の如き事實の存せざるは神が世界を攝理せざるを證するものなりと。然れども此の

如き事實が果して存せざるかは別問題として吾人は先づ茲に論者の立論が睿智なる至上の實在の概念と矛盾するを認めざるを得ず。至上の實在が若し睿智なる者ならんには此實在が世界に一定の理法を賦與し此理法を破ることなく變更することなくして世界を統治するを得るは當然の事にして敢て奇とすべきに非ず。完全なる神が世界を攝理すとせば此攝理が萬有の理法及び勢力を傷けることなく世界の目的に背かずして行はるゝとするの外他に思想するを得ず。然るに之に反して神の超自然の作用が數々行はるゝとせんか、是れ神が一たび世界を造り後ち萬有の理法の缺點を認め數々自己の能力を發現して之を變更すと爲すものにして、神の完全を否認するものなり。

故に自然界の運行の規則的なること萬有の理法の不變なること及び有意識の存在物の行動の自由なることは神の攝理を否定するに足らざるを知るべし。吾人は神の攝理を超自然の勢力が萬有の運行を變動せしむるの意にのみ解すべからずして萬有の理法勢力の獨立に觸れず調和的に世界を其目的に導くの意に解せざるべからず。吾人は神の攝理の實跡を超自然の事件にのみ求めずして先づ殊に萬有の運行の規則的

なるに求めざるべからず。

此の如く神の攝理を立證するに神の超自然の作用に訴ふるの必要は固より無きなり。然れども今萬有の歴史にも人類の歴史にも超自然の現象存せずとの論者の断定が果して正しきか否かを講究するは敢て無益の業に非ず。何となれば此超自然の現象は少くとも神の攝理の事實を明白ならしむるものなればなり。

吾人若し人の宗教の認識を考察せば凡ての時を通じ凡ての宗教を通じて人の宗教の認識が神の超自然の作用を攝理と結合せしむるを發見すべし。人の宗教の認識は神が自然力及び萬有の理法を保護し指導するに止まらず人類の幸福の爲に超自然の現象を出だすを認む。而して此の如き超自然の現象即ち別言せば奇蹟は凡ての宗教に於て重要視せらるゝなり。

然るに哲學は宗教の認識の如く超自認の現象に信用を置かず。是れ科學が其理解し説明するを得ざる現象を排斥するに原由す。科學は凡ての現象を理解し説明せんとするものなるに、此種の現象は科學の領土を限界するものなるが故に科學が之を排斥するは敢て異ひに足らず。然れども吾人の理性が其有り得べきを認め實驗若くは

歴史が其事件の眞實なるを確證する以上は科學は此超自然の現象を排斥するの權利を有せず。

或る事件の眞實不眞實は理論に決定せられずして他の方法例へば歴史の批判、目撃者の證言、各自の實驗及び觀察にて決定せらるゝなり。哲學は其理論を根據として超自然の事件の眞實を否定するの權利を有せず。若し或る事件が公平なる歴史の批判に其眞理なるを證明せらるゝとせば、此事件が哲學の理論に容れられざるも事實として認められざるべからずして、之を排斥するは理論其者の偏見若くは缺點を示すなり。

然るに哲學は神の超自然の作用問題に於て常に歴史を無視し理論に説明せられざる歴史の事實を排斥するの傾きあり。去れど是れ異むに足らずして哲學は神の超自然の作用を公平に論評するの意なく豫め之を駁せんと期するが故に固より神の超自然の作用を排斥せざるを得ず。然れども神の超自然の作用の有り得べからずとの豫想は果して此事に關する明白の證跡を否定するに足る争ふべからざる眞理なるか。神の攝理を排斥する論者が攝理の特別作用即ち超自然の作用を排斥せざるを得ざる

は論理上當に然る所なり。然れども神の存在が認めらるゝのみならず神と世界との關係が認められんには神の超自然の作用も亦理論上認められざるべからず。實際に於て若し神が世界を創造し其全能の自由意志を以て萬有に理法を賦與せしならんには、勿論神は自己の必要に應じて此理法を變更するを得べきなり。萬有の理法は不變なるも此不變は神性に屬する絶對的不變に非ずして神の自由意志に支持せらるゝ比較的の不變なり。萬有の理法は此理法に反する超自然の作用及び現象を思想せしめざるまでに必然のものに非ず。例へば二二が四に非ずして五なりとは思想するを得ず。又同一の物が同時に白く及び白からざるを思想するを得ず。去れど自然の現象以外に超自然の現象を思想するは何の矛盾する所なし。何となれば世界の現在の秩序は萬有の尋常理法にのみ維持せらるゝに非ずして神の至高の理法に維持せらるればなり。

去れど斯く論ずる時は論者或は論難せん、神の全能力が超自然の現象を出だし得ること關しては勿論異論なし、然れども神は全能の性質を有すると共に不變の性質をも有するを記憶せざる可らず、故に神は其絶對の全能力に於て超自然の現象を出

だし得るとするも此事は神の性質上不可能のことなりと。

然り實に不變は神の固有する性質の一なり。神の不變の性質は其の受造物に對する意志の決定の不變をも要求し此決定は變更せられ若くは變改せらるゝを得ざるなり。然れども神の超自然の作用とは世界の秩序が豫定の如く行はるゝに拘はらず神が其理法を變更するを指すに非ずして、世界の秩序が豫定の目的に添はざるに依りて神が其理法を變更するを指すなり。若し世界の秩序が豫定の如く行はれ其以外に逸出するを得ざるものならんには神が其理法を變更するの要なく之を變更するは神の意志の不定及び不完全を示すものなり。去れど論者は世界に有意識の自由の存在物の存するあり之と共に神より賦與せられし徳義法が遵守せられざることの有り得べきを忘失したり。有意識の自由の存在物の社會に此徳義法の遵守せられざる事實あるは吾人の實驗する所にして此事は神の預定せし世界の秩序を變更せしむるものなり。之に依りて非常若くは超自然と名づけらるゝ神の意志の特別作用の必要起るなり。此非常特別の攝理の作用は徳義界に於ける犯則の現象に喚起せらるゝものにて、神の意志の變易及び動搖を示すものに非ざるのみならず却つて世界をして飽くまで其

豫定の幸福の目的を達せしめんとする神の意志の決定の不變を示すものなり。之に依りて奇蹟若くは攝理の超自然の作用は徳義界の秩序が原始の完全を失ひ神が之を回復するを想はしむるものなり。而して宗教も亦此意義に於て奇蹟を解す。即ち宗教は奇蹟を以て人の墮落に因りて毀損せられたる世界の秩序を原始の完全の状態に復せしむる超自然の作用として解す。何となれば罪惡に依りて其完全を失ひし世界の不自然の状態は之を原始の状態に復せしむる超自然の作用を要求すれば也。人の墮落に關する宗教の教理は勿論其多くの部分に於て秘義に屬するなり。然れども此秘義は主として其墮落の出づる原因に關するなり。而して墮落の結果即ち人の性の損傷を受けたる事實に至りては何人も此明白なる事實を否認するを得ざるべし。斯く墮落が那邊より來りしものとするも既に墮落の事實が認めらるゝ以上は世界の秩序を回復する攝理の特別作用の有り得べきも亦認められざるべからず。然れども論者或は論難せん、若し奇蹟が人の墮落に因りて毀損せられたる世界の秩序を回復する方法ならんには此方法は特殊に行はれずして平常に行はれ、神の超自然の作用は或る時にのみ行はれずして不斷に行はれざるべからず、然らざらん

は世界の秩序を回復する此至便の方法が何故に不斷に行はれず或る場合にのみ行はるゝかを解釋するに苦む、例へば何故に神は天災の類を以て惡漢を靚面に罰せざるか、何故に神は善人を天災より救はずして萬有の盲目の勢力が善人を惡人と併せ滅するを看過するかと。

去れど此論難は若し奇蹟が有り得べしとせば此奇蹟は不斷に行はれざるべからずと云ふに歸するものにて、此の如き論難は攝理と攝理の途とを皮相的に解釋したる主觀の獨斷の見解たるを免れず。神が絶對の睿智にして世界が獨立ならんには必ずや神の攝理は自然法を應用し人の自由を保全して行はるゝものならざるべからず。故に神の超自然の作用は最も止むを得ざる特殊の場合に於てのみ行はるべきものなり。而して此特殊の場合を臆測するは有限なる人智の企つべきに非ず。吾人は奇蹟が吾人の必要と認むる場合に行はれず神が奇蹟を以て惡漢を靚面に罰せざるを論據として一般に奇蹟を排斥するを得ず。若し吾人にして人類の預定の目的を知悉し、人類を此預定の目的に指導するの最善の方法を知悉せんには、如何なる場合に神の攝理が自然の方法を以て人類を預定の目的に指導し得るか又如何なる場合に超自然の方法

を要するかを推測するの權利を有すべし。然るに此預定の目的も此方法も吾人に不明なりとせば何故に攝理の超自然の作用が一の場合に行はれて他の場合に行はれざるかとの疑問は毫も根據なき臆測の疑問と謂はざるべからず。攝理の超自然の作用の行はるべき場所、時期、其方法は神の無限の睿智に定めらるゝ者にて有限なる人智の視ひ知る所に非ず。故に若し奇蹟が平素に行はれずとせば神が之を行ふを得ざるに因るに非ずして此事が人類の幸福を畫策する神の企圖に適はざるに因るのみ。去れど論者或は論難せん、萬有は原因結果の理法を以て密接に結合せられたる一團の物なり、故に萬有界に根據なき原因なき現象の存するを許さず、然るに奇蹟は原因結果の理法以外に行はるゝ現象として偶然の現象を成す者なり、去れば若し奇蹟が行はるゝとせんか此奇蹟は萬有の連行の連鎖を破壊し此結果として世界の全秩序に混亂を來さん、何となれば自然の現象の範圍内に挿入せられたる新現象は新理法に依りて各自に新現象を續發すべければなり、即ち自然の現象の一部は或る場所或る時に於て超自然の現象の爲に其運行を停止せらるゝに拘はらず自然の現象の他の部分は依然として其運行を繼續し、恰も機械に於て一の發條若くは車輪が其運動を

停止せられたるが如き不規律を現出すべく、或は自然の現象の範圍内に挿入せられたる新現象は原因と爲りて逐次に結果を起し、恰も機械中に不必要の砂石を投入せられたるが如き混亂を現出すべしと。

然れども此推論は萬有の部分と全體との關係を不正に解釋したる者なり。萬有の部分と全體との關係は機械に於て一局部の破損が機關全體に混亂を來さしむるが如き其關係に非ず。世界は機械的の物に非ずして有機的の物なり。彼の有機物に於て一局部の變化は全體に變化を及ぼさず。之と同じく萬有の一部分の變化も亦萬有全體に變化を及ぼすに非ず。例へば植物に於て樹枝が風の爲に一方に壓迫せられ若くは葉を落さるゝも此變化は植物の生命を害するに至らず。萬有に於ても亦然り。萬有の理法が或る場所或る時に於て超自然の勢力に變更せらるゝも此變更は萬有全體の秩序を攪亂するに足らず。今原因結果の理法以外に行はるゝ偶然の現象が萬有の自然の運行を沮害せざる適例を示さば萬有に對する人の自由行為の如き是れなり。萬有に對する人の自由行為は萬有の自然の運行に侵入するものにて一種の超自然的作用なるも而も此作用は萬有の調和的運行を害せず。例へば人が樹を伐るは萬有の自

然の運行に侵入するものにて萬有の豫期せざる偶然の現象なるも萬有の秩序は之が爲に混亂することなく其運行を停止することなく又此新現象は原因と爲りて萬有の運行の連鎖を破壊する新現象を續發することなきなり。然らば今樹が人の手に伐らるるに非ずして超自然の能力の作用に依りて突然に倒れたりと假定せんに同じく此事が萬有に何等の變化不規律を來すものに非ざるや明かなり。此の如く若し萬有に對する人の自由行為が萬有の獨立及び萬有の秩序理法を破壊するを得ずとせば、攝理の超自然の作用が世界の秩序を攪亂し得べしとの論難は甚だ理由なき推論と謂はざるべからず。

萬有の運行の規則的なるを論據とする以上の論難に比して科學の知識の成立を論據とする論難は一層取るに足らず。論者曰く、科學の知識は萬有界に超自然の現象が有り得べからざるを豫想するに於て成立す、然るに若し此の如き現象が有り得べしとせんか實驗の知識は其鞏固を失はん、何となれば此の如き超自然の現象が有り得べけんには吾人は萬有の現象の自然の原因を探究するとなく其理解に苦む凡ての現象の原因を超自然の原因に歸して満足すべければなり、故に科學の進歩は奇蹟の思想

が一掃せられ其理解に苦む現象の原因を超自然の原因に歸せしむる便法が人智より撤去せらるゝに至りて始めて期するを得べしと。

此論者の所論に對して固より吾人も多くの點を首肯するなり。然れども吾人が茲に論ずべき問題は奇蹟に於ける信仰が科學の知識の進歩を助くるか若くは妨ぐるかの點に非ずして奇蹟が有り得べきか有り得べからざるかの點なり。若し理論の原則が吾人に奇蹟の有り得べきを許し批判に保證せられたる實驗が吾人に此事を確實として示さんには此事が吾人の知識に悪影響を與ふるに拘はらず吾人は之を事實として認めざるべからず。吾人は或る歴史上の事件が風致を害し社會に悪影響を與ふるの故を以て其事實を抹殺するを得ず。之と同じく攝理の超自然の作用が吾人の知識の進歩を害するの故を以て此事實を排斥するは其當を得たるものに非ず。事實自身は其結果の如何を顧慮するものに非ずして而も事實の確實は其結果に證明せらる。尙論者が奇蹟が有り得べくんば科學が存立するを得ずと爲すは甚だ杞憂に過ぎたり。勿論奇蹟が有り得べくんば吾人が其解釋に苦む現象を悉く超自然の現象に歸するの弊害起らざるに非ず。然れども此弊害はカントの所謂奇蹟の概念の濫用にして眞實

の科學の知識に其害を及ぼす者に非ず。科學は或る現象を解釋するに其自然の原因に訴ふるを通則と爲し自然の原因を以て到底之を解釋するを得ざる時に於てのみ現狀の科學が之を解釋するに堪へざるを認め若くは之を超自然の現象に歸するなり。故に此通則は科學が弊害に陥らざるを保險するに餘りあるなり。然るに若し此通則が遵奉せられず動もすれば人が其不明の現象を超自然の現象に歸するとあるとせんか、其罪は超自然の現象の思想に存せずして觀察者自身の迷謬に存するなり。攝理の超自然の作用を認容することが萬有の研究を妨害せざるは眞正の基督教徒の間に多數の自然研究者の存する事實が之を證す。彼等は未だ曾て其研究に於て奇蹟の概念を濫用し自己の無識若くは不學を蔽はんとせしとなきなり。中世紀に於て科學の進歩を害したるは攝理の超自然の作用に於ける信仰ならずして却つて萬有自身の靈力に於ける信仰なり。萬有の靈力の思想に其根據を有する妖術、鍊金術、占星術の類は眞實の科學の知識に容れられざるが如く基督教にも亦容れられざる者なり。然るに論者は超自然の作用を自然の作用中より甄別するの不可能なるを論據として再び奇蹟を排斥す。彼等論じて曰く、或る作用を奇蹟の作用として認定し自然の原

因の作用中より超自然の原因の作用を甄別せんと欲せば自然の勢力を完全に知悉し自然法と其結果とを適切に配合するを要す。然るに萬有を知悉し萬有の各現象の自然の原因を知悉するは人智の企て及ぶ所に非ず。故に吾人は非常特殊の現象に接して此現象が萬有の或る未発見の勢力の作用ならざるなきか或は萬有の勢力の特殊の配合ならざるなきかの疑念を撤するを得ず。之に依りて吾人は非常特殊の現象に接して之を不明の現象に歸するを得べきも之を超自然の現象に歸するを得ずと。

然り吾人にして若し各現象の原因を解釋するに必ず萬有を知悉し萬有の勢力を完全に知悉するを要する者ならんには論者の論ずる所は理なきに非ざるも實際に於て吾人に此の如き必要は毫も存せざるなり。吾人は個々の物を觀察し萬有の勢力を綜合して之に觀察を下し此觀察に基きて萬有の原因を解釋するなり。故に此觀察は吾人に萬有の勢力に關する正しき概念を得せしむるに足り、萬有の勢力の特殊の配合が超自然の現象を出だし得べきか得べからざるかを判定するを得せしむ。例へば人の語が突然に病者を癒し死者を復活せしめ枝より葉を生ぜしめ花を出ださしめ實を結ばしむるを得ざるは何人も疑ふ所に非ず。然るに此の如き現象を解釋するに萬有の

未発見の想像の勢力を以てせんとするは是れ知識の領土に空想の假定の侵入を許す者なり。科學は現時に於て斯る不可思議の勢力を其領土より放逐するものなるに、超自然の作用に於ける信仰を打破せんが爲に此勢力に訴ふるは實に奇怪と謂ふべし。尙論者が論ずる萬有の自然の勢力の特殊の配合が超自然の現象を出だし得べしとの説も亦取るに足らず。吾人は此の如き特殊の配合を萬有界に見ず、又科學の知識の有らゆる方法を以てしても人工的に之を出だすを得ざるなり。且つ若し此の如き特殊の配合が有り得べしとせば此配合は既に萬有の自然法に依りて行はるゝに非ずして、萬有の理法及び勢力をして此の如き現象を出だすに導きたる特別なる超自然の勢力の作用に依りて行はるゝを想はしむるなり。此の如く吾人は超自然の作用を自然の作用中より容易に甄別するを得べくして之が爲に必ずしも萬有の理法を完全に識るの必要なきなり。勿論萬有の理法勢力に精通せざる人に在りては自然の特殊の現象を奇蹟の現象に歸するの虞なきに非ず。然れども吾人が萬有の現象と其原因とに關して普通の知識を具ふる限りは萬有の自然の勢力が如何なる現象を出だし得べきか出だし得べからざるかを判定するを得べし。斯く吾人は如何なる現象が科學の

知識の範圍に屬するかを判定するに難からずして、唯だ科學の假面を被ひたる不信が超自然の現象を自然の現象中より甄別するを得ずとの口實を以て超自然の現象を排斥するのみ。

科學の知識の擁護を目的とする論者のみならず德義法の擁護を目的とする論者も亦攝理の超自然の作用を排斥す。カントの哲學は德義法の絶對の自主を主張する者に、其主張に據れば此德義法は局外より獎勵せらるゝが爲に遵奉せらるゝに非ずして此法自身の眞理と神聖の爲に遵奉せらるゝを要するものなりき。故に此德義法の遵奉を獎勵するに其神出たるを以てし其神出たるを證明するに奇蹟を以てせんとするは此德義法の純潔を毀ち其神聖を傷くるものなりき。カント曰く奇蹟に證明せられて始めて德義法の神聖を認むるは是れ德義法を褻瀆したる不信に外ならずと。唯理論者等はカントの此見解を布衍して曰く、奇蹟に於ける信仰は眞正の德義を害ひ德義法の神聖を汚瀆するものなり、故に神は全能者として奇蹟を出だし能はざるに非ざるも此事は德義的最完全としての神の性質上に於て能はざる所なりと。然れどもカントの此見解は一方に僻したる偏見たるを免れず。假りに奇蹟の目的が

單に德義法の神出たるを證明するに在りとするも之が爲に奇蹟が德義法の勢力を殺ぎ又至上の立法者たる神が其性質上に於て奇蹟を出だし能はずと言ふを得ず。今一步を譲りて眞正完全の德義法とは局外より獎勵せられ若くは他の目的の爲に遵奉せらるゝに非ずして德義法自身の眞理と神聖の爲に遵奉せらるゝを指すとするも、德義法の神聖を斯く明かに解し德義法自身の爲に德義を行ふは德義思想の發達したる一部の少數の人にのみ望み得べくして一般の多數の人に望むべからず。反對論者と雖も一般多數の人が德義法の神聖を解し理論的概念の爲に德義を行ふに非ずして他の種々の獎勵就中德義法の神出に於ける信仰の爲に德義を行ふものなることの顯著なる事實を排斥するを得ざるべし。之に依りて若し此德義法が獨り哲學者にのみ遵奉せらるゝに非ずして凡ての人に遵奉せらるゝを要し又人の德義思想の發達の程度に應じて種々の獎勵を要すとせば、至上の立法者が當時に於ける人の德義思想の發達の程度に照して種々の獎勵の方法就中德義法の神出に於ける信仰に訴へて德義を獎勵するは敢て奇とするに足らず。故に神が德義法の神出を證明するが爲に其證明の現象即ち奇蹟を出だすは當然の途にして決して思想し得べからざる事に非ず。

此の如く攝理の超自然の作用は決して有り得べからざる事に非ずして、奇蹟の效用に對する批判哲學の見解は一方に僻したる偏見と謂はざるべからず。凡そ奇蹟の效用は唯だ徳義法の神出を信ぜしめ徳義法の威力を強大ならしむるに在るに非ず。天啓の宗教は吾人に唯だ徳義法の眞理を傳ふるのみに非ずして神及び人の救贖に關する超自然の眞理を傳ふるなり。而して此眞理は人智を超越したる者にて人が理論の上に於て合理的に解するを得ざる者なり。故に人をして此眞理を信ぜしめんと欲せば理論の立證を以て目的を選するを得ずして此眞理の神出を信ぜしむる超自然の立證に訴へざるべからず。斯く攝理の超自然の作用の必要は天啓の宗教の眞理が超自然にして人智を超越すると神が人類の救贖を企圖するに於て起るなり。

以上論じ來りし如く攝理の超自然の作用に對する反對論者の論難は一として此作用の有り得べきを否定し得るものに非ず。故に哲學は此作用の事實を否定するの權利を有せざるものとして此事實の證明を歴史の批判に委せざるべからず。而して吾人は實に聖書及び教會史に於て傳へらるゝ神の超自然の作用の傳説が歴史の批判に其確實を證明せらるゝを知るなり。基督教會の辯證學は記録に於て傳へらるゝ攝理の

超自然の作用の傳説を審査し其確實を證明して餘す所なし。然らば基督教以外の他の宗教に於て傳説せらるゝ神の超自然の作用は如何と問ふに其傳説が如何に妄誕なるも吾人は之を等閑に看過すべきに非ず。何となれば傳説其者は妄誕なるも此傳説の由つて來る所以は神の超自然の作用の有り得べきを確信する信念に基くものなればなり。斯く宗教の認識の極端なる發現さへも之を主觀の偶然的發現として見るを得ずとせば況んや此認識の根據ある信念は大に眞理を含む者として認められざるべからず。凡そ神の全能力の超自然の發現に於ける信念は凡ての時を通じ凡ての民族を通じて宗教の認識の基礎を成すなり。故に異教民族の間に存する奇蹟に關する傳説中に於て妄信虚構より出でたる無数の妄説存するも其奇蹟に於ける信念の堅固なると宗教の傳説の歩調の一定せるは此傳説の一般の基礎が全然虚構より來るに非ずして其本源が宗教的生活の實驗より來るを示すなり。虚偽の傳説は眞實の傳説の模倣若くは之が偽作としてのみ起るを得べきものにて、彼の贋造貨幣の存するは眞正の貨幣の存するを想はしむるが如く、虚偽の奇蹟の存するは既に眞實の奇蹟の存するを想はしむるものなり。(完)

明治三十九年三月三十一日印刷
明治三十九年四月十日發行

神の擬理を論ず

正價金四錢五厘

翻譯者

松本高太郎

東京府下豊多摩郡千駄ヶ谷村九百八十七番地

印刷者

中野鉄太郎

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印刷所

帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地

發行所

正教會事務所

東京市神田區駿河臺紅梅町六番地

